

〔教育実践研究〕

子どもと養育者の継続的観察による学生の学習成果

谷口 恵美子 長谷川 桂子 石井 康子
 泊 祐子 西田 倫子 豊永 奈緒美

Student's Learning Outcome from Continuously Observing Rearers and Children

Emiko Taniguchi, Keiko Hasegawa, Yasuko Ishii,
 Yuko Tomari, Michiko Nishida, and Naomi Toyonaga

I. はじめに

小児看護の対象は子どもとその養育者であるが、近年少子化が進み学生が対象と接触する経験は少ないと考えられ、看護学生の子どもへの関心について研究が多く行われている。先行研究では、看護学生は子どものイメージを具体的に描きにくくなってきており¹⁾、実習前の彼らは子どもに接することが楽しみや期待感を持っている反面、子どもを未知なるものと捉えて不安や戸惑いの源泉と感じていると報告されている²⁾。さらに学生にとって子どもは見知らぬ対象であり、実習中に戸惑いがあることが報告されており³⁾、子どもに対する理解の不足は実習を行ううえでの何らかの障壁になっていることが予想される。

われわれはこのような研究結果を鑑み本学に入学する学生たちも同様の状況であろうと考え、小児看護の対象である子どもの理解を深めるために1年次には、『地域の中で生活する子どもの理解』という、子どもを実際に観察するフィールド観察学習と、2年次に『継続的な子どもと養育者との関わり日誌』という1年間子どもとその養育者を訪問し観察するという課題（以下継続的観察）を設定している。

今回はこの継続的観察の学習成果を、継続的観察終了後のグループ討論のレポートから考察し報告する。

II. 継続的観察とその討論の概要

継続的観察とグループ討論の概要について述べる。

1. 継続的観察の概要

3年次に行われる小児看護領域実習に向けて、小児看護の対象となる子どもや養育者の理解を深めるための事前学習の一つとして、平成16年より、2年次の5月に『継続的な子どもと養育者との関わり日誌』という、子どもとその養育者を訪問し観察するという課題を与えている。1年間継続的に子どもと養育者との関わりを観察することにより、実際の子どもの成長・発達を把握し、養育者の育児についての考えや感情を知ることが目的としている。学生への課題の提示内容を表1に示した。

対象は親戚や近所に住む乳児から小学校低学年までの子どもと家族とし、対象の選択、対象者への継続的観察の内容や倫理的配慮を行うことの説明および協力を得ることまでを学生自身が行っている。説明にあたって何らかの問題や、観察中に養育者からの質問があった場合には調べて正確な情報を伝えること、それができない場合には教員に連絡を取るよう学生に伝えている。観察は

表1 継続的観察の学習目標および課題

学習目標

- ・継続的な観察により、子どもの成長・発達を把握できる。
- ・養育者と子どもとの関わり様子を観察できる。
- ・子どもの発達段階と養育者の発達課題を結びつけて考えられる。
- ・子どもの発達を観察できる能力を養う。

課題

- ・養育者に育児の工夫や困難、喜びや苦労をお聞きする。
- ・子どもの遊び相手をし、子どもの成長・発達の観察をする。
- ・子どもとの関わりや観察から発達（運動的・精神的・心理的）を発達理論等を利用して考察する。
- ・養育者の育児について学ぶ。

約1年間を通じて複数回訪問し行われるが、その訪問回数は学生によって異なり、頻度は最低で2回、最高は6回であった。

2. グループ討論の概要

継続的観察の記録提出は3年次の4月で、この後、記録を基に継続して観察した子どもの成長・発達と養育者のかかわりについて仲間と学びを共有し、小児看護の対象についての学びを深めることを目的としグループ討論を行う。グループは観察した対象児の年齢が異なるように編成し、さまざまな年代の子どものとその養育者について理解できるようにしている。グループ討論に際しては、各自の観察した子どもと養育者についての紹介を行った後、1年間の子どもの成長・発達と養育者の関わり、家族の育児について違いや共通点について討論するように指示を与えている。最後に「討論したことによって学びが深まったことは何か」についてレポートさせている。

Ⅲ. 方法

1. 研究対象

平成18年に行われた継続的観察に関するグループ討論終了後に記述を求めたレポートのうち、研究参加協力の得られた学生68名分のレポートである。

2. 分析方法

レポートの文章を書かれた文脈の意味に沿ってわけた。次にその文章の内容が類似したものを集めカテゴライズした。この作業にあたっては、共同研究者間で合意が得られるまで繰り返し検討した。

3. 倫理的配慮

学生に研究参加は自由意思であること、研究参加の同意の有無は成績に影響しないこと、プライバシーの保護に努めることを文書と口頭で説明し、書面で同意を得た。また同意を撤回する場合の期限も説明文に明記した。

Ⅳ. 結果

観察の対象児は0歳から8歳の87名であった。討論により深まった学びの内容は302の文章が抽出され、大きく『子どもの理解』と『子どもを育てることの理解』の2つに分けられた。さらに『子どもの理解』では6つ、『子どもを育てることの理解』では4つのカテゴリに分けられた。表2には「子どもの理解」について、表3

には「子どもを育てることの理解」の記録内容を示した。

1. 子どもの理解

199の文章があり記述の多い順に【発達に影響する要因】【発達の特徴】【子どもの行動】【子どもにとっての遊び】【母親の存在の重要性】【性格形成に影響する要因】の6つのカテゴリに分けられた。以下にそれらのカテゴリの内容を説明する。

子どもの発達に関する【発達に影響する要因】と【発達の特徴】の記述は、7割を占めた。【発達に影響する要因】はその中の最多で、内容は環境、子どもの特性、育て方、遊び、両親の育児参加度、精神の安定から構成されていた。その中の環境要因としては、環境や地域という言葉を使い大きく捉えた記述も見られたが、多くはきょうだいや家族や周囲の人々など人的環境をあげていた。

【発達の特徴】は、子どもの発達の法則性と個人差についての記述で構成されていた。発達の法則性では、共通性、順序性、年齢による発達の速度の違いについて述べられていた。個人差については、性差による違いも述べられていた。

発達以外の記述では【子どもの行動】が次に多かった。その中では子どもの行動の特徴があげられていただけではなく、子どもは他人を観察して模倣を行っているというように、後天的にどのように行動を獲得していくかについての記述がみられた。次に【子どもにとっての遊び】であるが、遊びそのものの記述ではなくその重要性や遊びに影響する要因のほかに、遊びは子どもにとって学びの場であり、その内容は子どもの発達の指標となるという、遊びの意味を記述したものがあつた。

他に少数であるが、【性格形成に影響する要因】では性格形成には人とのつながりが大切であり、要因として具体的にはきょうだいがあげられていた。また【母親の重要性】では、子どもと母親または主たる養育者の深いつながりを感じたという記述があつた。

2. 子どもを育てることの理解

103の文章があり、多い順に【育児から得ること】【育児に影響する要因】【育児サポート】【養育者の行動】の4つのカテゴリに分けられた。以下にカテゴリの内容を示す。

観察のみではなく、養育者へのインタビューを通じて

表2 継続的観察記録の内容—子どもの理解

() 内は記述数

カテゴリ	内容	詳細	具体的内容例
発達に影響する要因 (86)	環境 (67)	きょうだい (23)	きょうだいがいるといないとでは、発達になにか影響を与える。
		環境 (22)	子どもは、環境によって成長・発達の仕方が変わってくる。
		家族 (10)	家族などの影響が成長・発達に関わること。
		人的環境 (9)	子どもは、いろいろな人との出会いふれ合うことで心の成長・発達をしていく。
	子どもの特性 (6)	集団への所属 (3)	保育園などに行っている子どもは発達も少し早い。
		健康状態 (3)	同年齢でも、健康児と疾患のある子どもでは発達段階は異なる。
		個性 (3)	その子どもの個性が、成長・発達に影響してくる。
	育て方 (4)	育て方 (4)	同じ年齢でも、親の育て方など環境によって個人差がある。
	遊び (4)	遊び (4)	遊びも成長に大きな影響を与える。
	精神の安定 (3)	信頼 (1)	子どもは、信頼できる人、安心できるところがあるから、いろいろなものに興味を持ち、自律していく。
		愛情 (1)	「愛情を受ける」ということが子どもの成長発達に大きく影響している。
		達成感 (1)	子どもは、自分でできるようになったこと、親や私たちにほめられたりすることを喜び、さらに意欲を増している。
	両親の育児参加度 (2)	父親の育児参加 (1)	父親の育児参加の程度にも発達に違いがあること。
		母親の就労は関係しない (1)	母親が働いていても、子どもは発達段階に沿って発達していく。
発達の特徴 (59)	法則性 (34)	年齢による違い (16)	年齢の違いによって発達するところや早さが違う。
		共通性 (7)	同じくらいの年齢の子どもは発達の特徴が似ている。
		順序性 (7)	成長・発達には、順序性がある。
		連続性 (4)	様々な成長・発達が1つの大きな成長につながる
	個別性 (25)	個人差 (23)	子どもの発達は、一人ずつで異なる。
		性差 (2)	性差によって、子どもの成長発達が異なる。
子どもの行動 (23)	獲得する行動 (18)	他人を観察し模倣する (18)	人のまねをすることで、生活行動や人とのかわり方を学んでいく。
	行動の特徴 (5)	自己中心 (3)	0～4才ぐらいの子どもは、自己中心性が強い。
		サインの発信 (1)	子どもは様々なシグナルを出している。
		突発性 (1)	子どもは予想外のことをする。
子どもにとっての遊び (18)	関わる要因 (8)	きょうだい (6)	きょうだいの有無でも遊び方に違いがみられる。
		環境 (2)	同じ発達にある子どもでも周りの環境で、遊びが違う。
	意味 (8)	成長発達の指標 (5)	遊びを観察する事で、子どもの成長・発達の程度を確認することができる。
		学習 (3)	子どもは遊びの中で様々なことを学ぶ。
	重要性 (2)	重要性 (2)	遊びはどの年代においても重要である。
母親の存在の重要性 (7)	母親の存在の重要性 (7)	母親の存在の重要性 (7)	年齢が幼ければ、幼いほど、母親に依存している。
性格形成に影響する要因 (6)	性格形成に影響する要因 (6)	きょうだい (4)	きょうだいの有無では、子どもの性格や内面的なことがちがう。
		人的環境 (2)	情緒面や性格の形成には、親・きょうだい・他の家族やまわりの人たちのかわりが大きく影響する。

理解することができる【育児から得ること】については、5割弱の記述が得られ最多であった。養育者の悩みや喜びのほかに、育児がもたらす養育者の成長をあげていた。

育児の様子を通して具体的に観察できる【養育者の行動】は、養育者としての育児に対する基本姿勢や育児情報の収集のほかに、具体的な行動として子どもにとって安全な環境を作ることなどをあげていたが、数は少なかった。それに比べ【育児に影響する要因】は、子どもと養育者を取り巻く環境、育児経験が要因としてあげられたほかに、養育者の就労の有無や考え方という養育者自身の資質にも触れ、【育児から得ること】の次に多かった。

【育児サポート】では、サポート資源として祖父母な

ど家族のほか周囲の人々の存在をあげ、さらに育児サポートの必要性やサポートを受けることの意味について記述されていた。

V. 考察

討論後のレポートから得られた学びの集約から学習成果を考察し、継続的観察についての問題について検討する。

1. 学習成果

結果で大きく分けられた『子どもの理解』と『子どもを育てることの理解』にわけて考察する。

1) 子どもの理解

子どもについての記述のなかでは、発達に関するもの

表3 継続的観察記録の内容—子どもを育てることの理解

() 内は記述数

カテゴリ	内容	詳細	具体的内容
育児から得ること (47)	悩みに影響する要因 (14)	子どもの特性 (3)	子どもの性格によって、育児の困難の程度が違う。
		育児経験の有無 (3)	養育者は第1子であるかによって育児に対する不安が違う。
		きょうだいの数 (2)	複数の子どもをもつ親は、他のきょうだいの悩みなども抱えており、大変な面もある。
		環境 (2)	家族構成によって、育児の困難の程度が違う。
		養育者の就労 (2)	養育者の職業によって、育児の困難の程度が違う。
		養育者の性格 (1)	養育者は、育児に関して心配性な人もいれば、そうでない人もいる。
		他児との比較 (1)	養育者は、他の子と比べて我が子の成長発達をとてよく気にしている。
	養育者の悩み (13)	可変性 (6)	子どもの成長発達に伴い、母親の育児などに対する心配・不安が変化する。
		多様性 (4)	子育ての悩みは、多種多様だ。
	養育者の喜び (12)	必然 (3)	どの家庭においても、その家庭なりの問題をかかえている。
		子どもの成長 (7)	子どもの成長や発達は養育者によって、大きな喜びであり、育児の力となる。
		子どもの存在 (3)	養育者の喜びは健康な子ども、病気の子とも同じだとわかった。
		他者評価 (2)	養育者はその成長を他の人から言われたりすることで喜びを感じている。
	周囲の人間の成長 (8)	家族の成長 (7)	子どもの成長・発達に伴い、その家族も成長する。
		育児の巧みさ (1)	母親も児の成長に伴い、少しずつコツや自分なりの育児のパターンを見つけていくこと。
育児に影響する要因 (22)	環境 (11)	環境 (4)	環境（祖父母の同居の有無、地域性、きょうだいの有無など）により、育児も変化する。
		家族 (2)	育児において、母親以外の養育者（祖母・上の子など）の存在は大きい。
		きょうだい (3)	きょうだいの有無は、子育てに大きく関わる。
		人的環境 (2)	育児を支援してくれる人の有無やきょうだいの有無も、子育ての仕方に大きな影響をあたえている。
	育児経験 (4)	育児経験 (4)	養育者が育児を経験しているかどうかによって育児の内容、関わり方が変わる。
	養育者の考え (4)	養育者の考え (2)	それぞれの親の子どもに対する考え方によって子育ての方法が異なる。
		養育者の職業 (1)	養育者の職業によって、育児の内容が違う。
		養育者の性格 (1)	母親の考え方・性格によって、育児を大変に思うかどうか、変わってくる。
	子どもの特性 (3)	出生順位 (2)	上の子と下の子では、育て方が変わる（保健師さんのアドバイスや、ママさん情報、雑誌情報が変わってくるから）
		子どもの性格 (1)	子どもの性格によって、育児の内容が違う。
育児サポート (21)	資源 (13)	人的環境 (9)	育児には、両親だけでなくいろいろな人が関わることで成り立っている。
		祖父母の存在 (4)	核家族よりは、祖母などがある家庭の方が、育児の負担が少ない。
	必要性 (4)	必要性 (4)	子どもや家族にとって周りのサポートはとても大切。
	意味 (4)	負担の軽減 (3)	主養育者の周りに援助者やサポートしてくれる環境があると、育児の負担も軽減されるし、精神的な面でも安定できる。
		就労の継続 (1)	祖父母など周囲のサポートがあり、両親は仕事をしながらできる。
養育者の行動 (13)	基本的な姿勢 (7)	個別性 (4)	きょうだいがいる場合は、養育者は、一人ひとりの特徴を理解した上で育児を行っていくことが大切だ。
		愛情 (1)	養育者（特に母親）は、子どもに愛情をもってかかわっている。
		公平性 (1)	育児はきょうだいに対し、偏りのない対応が必要だ。
		子どもの手本 (1)	子どもは真似をするので、家族、特に親は、子どもの手本になるように心がけて育児することが大切である。
	安全な環境 (3)	危険防止の実施 (3)	家庭内では、子どもの発達にともない部屋等の環境を整え、危険がないようにしている。
	育児情報の探求 (3)	人的資源 (2)	親は子育てについて周りの人々から情報を得ている。
		雑誌 (1)	親は子育てについて雑誌などでも情報を得ている。

が一番多く見られた。子どもの1年間の成長・発達の実際を見るということを体験し、他の学生の報告から様々な年代の子どもの成長・発達も知ることにより、1年次後期で履修した子どもの発達の共通性や順序性、年齢による発達のスピードの違いといった発達の法則性の実際を確認する機会になったと考えられる。また子どもは規則的な発達段階を経る反面、個人により異なる部分が存在するが、発達の個別性については講義で説明を行っても、実際どのような現象として現れるのかは伝えにくい。継続的観察を通じて個別性の実際を知ることができたことは、この知識の不足した部分を補うことになり有益だと考えられる。

これらは継続観察を用いなくても、確認できることかもしれないが、記述にはさらに「様々な成長・発達が1つの大きな成長につながる」とあり、時間軸で成長・発達を捉えていた。西田³⁾によると一人の子どもが成長する過程を見たことがない学生にとって、子どもを観察することはその一時点の子どもの理解につながっても、連続体として捉えることができないのではないかと指摘されている。継続的観察とその討論では、子どもの発達についての知識の確認だけでなく、時間軸のなかで子どもは常に発達しているという事象を確実に捉えることができたのだと考える。

グループ討論の時に与えた指示は違いや共通点の検討であったが、学生たちは子どもの発達の違いや共通点の確認だけではなく、その中からなぜそのような差異が出現するのかということを考察することができていた。子どもの発達に影響する要因では、環境に着目しており、特にきょうだい・家族など人的環境が多くあげられていた。また子どもの行動が周囲の人の真似をすることによって形成されていくこと、さらに子どもにとって遊びは重要であり、それに関わる要因にきょうだいをあげるなど、子どもの成長・発達が周囲の人々との関係の中で形成されていくことを知る機会になったと考える。

子どもの成長・発達に関係する環境因子には、①子どもの健康状態、②子どもの生活習慣、③家庭環境、④社会的環境があげられる⁴⁾。環境因子についての学生の記述は、家庭環境や社会的環境が多く、子どもの健康状態や生活習慣に着目したものは少なかった。これは健康な子どもを対象に観察した学生がほとんどだったためと、

継続観察と言っても1日を通しての子どもの観察ではないため、一部の生活習慣しか目にすることがなかったためであると考えられる。そのため子どもの発達に影響するこれらの環境因子の理解について、補強する必要があると思われる。

継続的観察を行うことで、学生は成長・発達の共通性や個別性の実際を確認し、子どもにとっての遊びの必要性や周囲の人々を含めた環境が発達に影響を及ぼす関係性に気付くことができていたことから、子どもの理解を深めることができることが明らかになった。看護教育現場からは、子どもにとっての遊びの必要性、環境刺激の成長・発達への影響について実習後に気付いているという報告⁵⁾や、実習によって子どもを一般的、通俗的なものから個別性のある発達を示す者として捉えるようになったという報告²⁾がある。継続的観察を行うことで、実習後の学びと同様の子どもに対する理解が得られることが確認された。

2) 子どもを育てることの理解

子どもを育てることについての学生の記述は、養育行動そのものではなく、どのように育児が成立しているかに着目されたものが多かった。育児も子どもの発達同様に一通りではなく、様々な要因が背景にあることに気付くことができていた。環境といった外的因子だけでなく、養育者の考えといった内面に気付くことができたのは、1年間という長期の関わりを通じて、子どもや養育者との信頼関係を培うことにより達成できたのではないかと考える。

育児サポートについての記述は、全体的に見ると少ないが、育児が主たる養育者である両親のみでなく、多くの人々の協力によって成り立つものであり、支援の必要性や資源に気付くことができた。実習後の学びの中で育児サポートの必要性について気付いているという報告がある⁵⁾。これは実習現場で、子どもの入院という突発した出来事から家族役割の混乱を生じた症例の看護を通じて、育児サポートの必要性を認識することができたのではないかと考えられるが、継続的観察からも育児サポートの必要性について学ぶことができていた。これは、1年間の子どもの成長・発達に伴う育児の質や量の変化を知ることができ、そこに介入される育児サポートの実際を見ることにより、その必要性が認識されたのではない

かと考える。

この継続的観察の課題には養育者に育児の困難や喜びを聞くという項目があるが、それに該当する内容が多く記述されているのは、学生にとって印象に残る大きな学びであったのだろうと推測する。育児について様々な悩みをもつ養育者の姿は、人を育てるといことの大変さを認識する機会になったのではないだろうか。さらに悩みながらも子どもの成長・発達への喜びが養育者の力となることを知ったことは、養育者が育児を担う人であるといった視点から捉えるだけでなく、子どもと養育者が互いに影響し合うことを知ることにつながったと考えられる。小児看護においては、子どもだけでなく家族に着目して、子どもの成長・発達や健康のために、さらに家族の健康を促進したり、親の育児能力を高めることが欠かせないと言われ⁶⁾、子どもと家族の包括的ケアが行われている。継続的観察で子どもと養育者が影響し合う実際を知ることにより、なぜそのような看護が必要なのかの根拠を学ぶ機会になったのではないかと考える。

2. 継続的観察の問題

養育者からの聞き取りを課題としているため、学生たちは育児についての実際やそれに伴う困難について知ることができた。そして育児に困難があるにも関わらず、養育者が育児から喜びを得ていたり、その経験から養育者自身が成長することを知ることができていた。これらは養育者の生の声を聞くということにより、机上の学習だけでは得られない有益な体験ができたと考えられる。

養育者が困難なことを話した際、看護学生への質問として発言されたことが考えられる。しかしこのときに、学生がどのように対応をしていたのかは不明である。養育者から質問等を受けた場合に自分でわからないときには、不正確な返答はせずに、自分で調べたり担当教員へ尋ねるなど、確実な情報を伝えるように指示してあるが、学生が教員に相談しに来た件数は少なかった。養育者からの質問に曖昧な返答をしたような状況がなかったのなら良いが、もし質問に対して適切でない対応があったとしたならば、学生の学習に取り組む姿勢の問題だけではなく、協力いただいた養育者に対しての誠意といった倫理的な問題も生じてくる。幸い協力いただいた養育者からは苦情等の連絡はない。

今後は、養育者からの質問や相談に対し学生自身がど

のように対応したのか、具体的な状況を確認する機会を設ける必要があると思われる。さらにそれらの質問を共有することで養育者の理解や育児の悩みの理解につながる教育へと発展させたいと考えている。

VI. おわりに

学生は継続的観察により、子どもの成長・発達の共通性、順序性、発達段階による成長速度の違いといった知識の実際を確認し、さらに時間軸のなかで連続したものとして捉えられるようになることがわかった。また育児については、環境や養育者の考え、子どもの特性によって異なることと、育児へのサポートの重要性に気付いていた。そして養育者の話を直接聞くことは、養育者自身の育児についての具体的な思いを知り、育児に携わる人間の成長を感じる機会となることが確認できた。しかし子どもの成長・発達に影響する要因については、環境要因について多く捉えており、偏りがみられた。

実習前に継続的観察を行うことにより、学生は対象理解が深まり、実習で対象に接する際の困難感の減少につながるのはのではないかと予測される。

文献

- 1) 石原あや、藤井真理子、鎌田佳奈美他：看護学科学生の子どもとの接触体験及び認識に関する調査 1983 年の調査と比較して、大阪府立看護大学医療短期大学部紀要、8；65-72、2003.
- 2) 東野充成、松木美奈子、大池美也子：保育園実習に見る看護学生の子ども観、九州大学医学部保健学科紀要、5；77-85、2005.
- 3) 西田みゆき、北島靖子：小児看護実習における学生の困難感、順天堂医療短期大学紀要、14；44-52、2003.
- 4) 奈良間美保：系統看護学講座専門 22 小児看護学、第 10 版；36-37、2003.
- 5) 坂本しのぶ、古池佳由理、服部満生子他：看護学生の子どもの関心、埼玉県立短期大学部紀要、4；45-52、2003.
- 6) 奈良間美保：系統看護学講座専門 22 小児看護学、第 10 版；8、2003.

(受稿日 平成 19 年 5 月 10 日)

(採用日 平成 19 年 8 月 6 日)